

01 巻頭言

長島 徹「外へ向かおう」

02 特集

学校と経営者の交流活動 2010 レポート

13 リレートーク

小山 眞一「失われた 20 年」考

14 経済同友最前線

第 1155 回会員セミナー

佛田 利弘 ぶった農産 取締役社長/
ジャパン・アグリカルチャー・マーケティング&
マネジメント (JAMM) 取締役副社長
「日本の農業改革～ムラから世界へ～」

社会的責任経営委員会
NPO・社会起業推進検討部会 活動報告

第 99 回 TCER セミナー

小田切 宏之 成城大学
社会イノベーション学部 教授
「経済活性化のために
競争政策の果たすべき役割」

18 コペンハーゲン通信

「すべての人に居場所がある社会」

19 同友会スケッチ

2010 年 9 月の記録と 11 月の予定

21 新入会員紹介

2010 年 9 月 17 日現在の入退会者

22 私の思い出写真館

小島 順彦
「米国勤務時代の思い出」



副代表幹事
もの・ことづくり委員会 委員長

長島 徹

帝人
取締役会長

外へ向かおう

先日、ノーベル賞受賞者が発表された。政治や経済をはじめ、沈むような話題ばかりが多い中、日本人お二人の化学賞受賞は、久々の明るい話題として心が躍った。

特に、根岸英一氏は、かつて帝人に籍を置いていたため、わがことのようにうれしく感じた。根岸氏は、大学卒業と同時に帝人に入社し、途中の留学を挟み研究所で活躍したが、有機合成化学をさらに追求したいとの思いから、勇躍米国に飛び立った。1960年代後半のことだ（ちなみに根岸氏は学生時代、帝人奨学会が運営する帝人久村奨学生の第5期生でもあり、いろいろと弊社とは縁がある方である）。半世紀近くも前のことであり、今のように気軽に海外に行ける時代ではない。組織を離れ、自らの力のみを頼りに海外に活躍の場を求めるのは、よほどの覚悟が必要だったはずだ。その気概が今日の成功につながっていると思い、根岸氏の生きざまに心より敬意を表したい。

ただ、気になることもある。根岸氏の研究室には、日本人研究員がいないということを聞いた。若者の理数系離れが叫ばれて久しいが、日本人の国外へ勇躍する意識や、理化学への情熱が薄れてきているのではないだろうか？ ノーベル賞受賞者が出る一方で、そんな危惧も感じさせる。

今の日本は、政治の迷走、デフレ、円高、教育の崩壊、凶悪犯罪など、先行きが不安になる話には事欠かないが、若者に限らず、明確な解決への糸口が見えないまま、議論が内向き中心になっているように感じるのは私だけだろうか？ ユリウス・カエサルが、「人は現実のすべてが見えるわけではない。多くの人は見たいと欲する現実しか見ない」という言葉を残したという。内にこもっている限り、人は自分が欲する現実しか見ようとしない。しかし、それでは何の解決策も見つからない。外に出れば、自分が見ようとしなかった現実を見ざるを得ないし、それが外に出る意味でもある。そして、これまで見えなかった（見なかった）現実が見えたときに、何らかの活路が見いだせると思う。現在、「もの・ことづくり」委員会の委員長を任されているが、特に「ことづくり」に関しては、外から客観的に見るのが重要となる。

先日、私は団長として、300名弱の 30代を中心とした若者たちと共に、ある洋上研修に参加した。その若者たちへも「外に出よう、外から内を見よう」と訴えた。今回の発信だけで、参加者すべてが自らを見直すきっかけとなるかは分からない。しかし、今後、自分自身も外へ向かう気概を持ち続けるように努め、同時に若い世代にも、外へ目を向けるよう粘り強く訴えていきたい。こうした本質的かつ重要なことには、継続と時間と忍耐が必要なのだ。

根岸氏が 50 年かけて夢をつかんだように。